

多くの人の目に光を

眼科手術の発展



眼科部長 丸山 百合香

極小切開硝子体手術

硝子体とは、眼球の中にある透明なゼリー状の組織のことで、その奥に網膜というものを見る神経の膜があります。ものを見る中心部をとくに黄斑と呼びます。

網膜疾患には硝子体が関与している病気が多くあり、手術の適応になります。

当院で施行されている硝子体手術の対象疾患は

1. 黄斑円孔
(黄斑に穴があき、中心だけ見づらくなる)
2. 増殖糖尿病網膜症
3. 糖尿病黄斑症
(黄斑のおくみにより見づらくなる)
4. 黄斑前膜 (黄斑に膜がはり、ものが歪む)
5. 硝子体出血、硝子体混濁
6. 網膜静脈分枝閉塞症
(網膜静脈がつまって出血、おくみを来たす)
7. 裂孔原性網膜剥離
8. その他
があります。

3カ所の創口を作り、1か所に灌流液注入器具を取り付けます。他の2カ所から硝子体カッター、照明用プローブ、鉗子などを出し入れします。(図1)

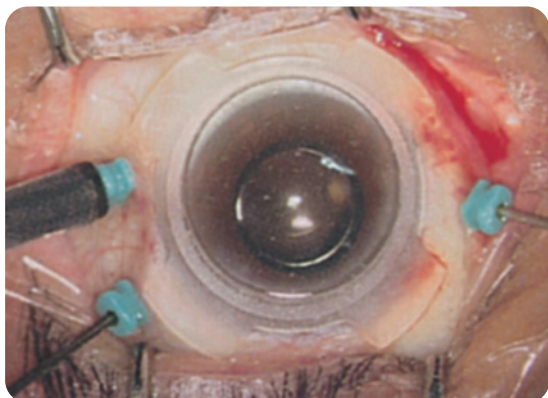
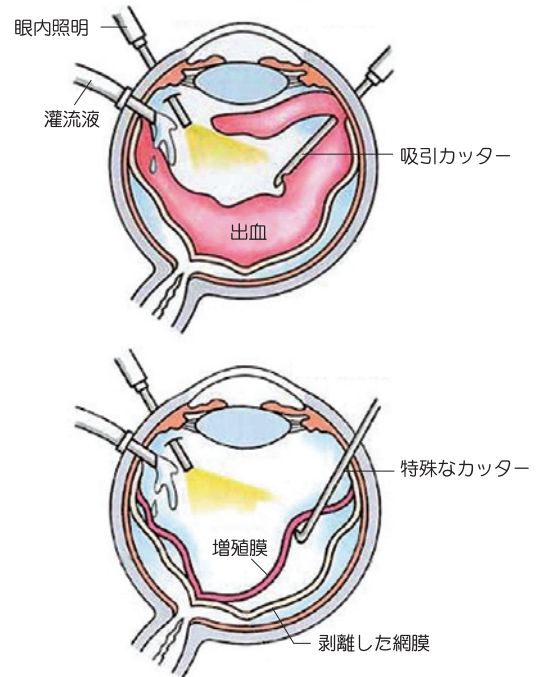


図1. 小切開硝子体手術

硝子体をカッターで切除した後、その奥の網膜の異常組織の切除、凝固等の処置を行います。



切除する硝子体や網膜組織はほぼ透明ですが、それらを可視化するための薬剤を使用し、より安全で確実な手術が施行できます。(図2)

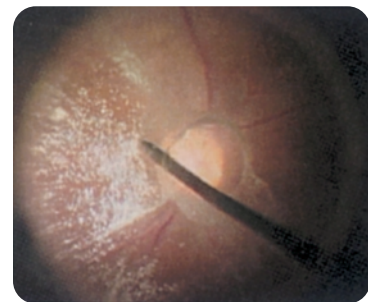


図2. 硝子体の可視化

当院ではすべての器具を従来の20ゲージよりも細い23ゲージのものを使用しています。器具を抜去した後に創口が自然閉鎖し、縫合の必要がない極小切開硝子体手術が施行できるようになりました。術中の眼圧変化や眼球変形が少なく、術後の炎症が低減されます。

また術後の異物感も軽減され患者さんにも優しい手術が可能となりました。

今後も、より安全で患者さんの負担を軽減できる治療を目指していきたいと思っております。